

「♪君たちがい～て、僕がいた♪ ②」

僕の精神年齢は高校時代でストップ！と当 HP でも公言している（HP「雑学 BN」の随想等関係（Ⅲ）、2005.7.18.「♪君たちがい～て、僕がいた♪」：参照）。
そう思うのは、高校時代にたくさんの友に恵まれたから。

その中でも仲良しグループ（男友達：僕を入れて4人、女友達4人）が、今回は女性1人がどうしても都合がつかなかったが、6人が「みんなの想いは、一緒に逢って話がしたい。若かりし日のあの時に戻りたい。それを得に仙台に出掛けるのですから。」と、大震災の見舞いに一泊だけで、関西から空路で、関東から新幹線で来仙してくれた。

この仲間は、就職後も、更に結婚後も住む所が異なるのに、帰省する度に全員は無理としても何人かは集まってくれ、お陰で家内もこの仲間とは顔見知り。

こうした良き仲間に恵まれていたので、我が子に「良き友人に出会う人生であるように！」との願いから、男友達の名前の一字と僕の一字を取って名前をつけたほど。

大学は異なっても大学生時代には、6人で東北、北陸を旅した仲間でもあり、あの時に都合で参加できなかった女性は、「今回は、あの時のリベンジだから！」と、膝が痛いので痛み止め注射を打ってまでの来仙。

今にして思えば、お互いに男友達、女友達ということ意識せずに仲良し仲間と純粋に友情を育てて来たからこそ、男性陣の奥さん、女性陣の旦那さんは、今回の来仙を理解してくれたと思う。

大震災で無事だった僕の顔を見るために遠路をわざわざ来てくれるので、宿は温泉にでも招待しようと申し出たが、早速みんなから電話で「招待じゃ、行かない！全て頭割り！」の言葉に甘え、また、宿の夕餉には家内も誘ってくれた。

それにしても出迎えた空港で顔を見た瞬間から見事なまでにあの頃にタイムスリップできるこの仲間は、改めて、我ながら言葉では説明のしようがない摩訶不思議な仲間とつくづく思った。

「今回は観光旅行でないからね！」と強く言われていたが、折角なのでレンタカーを借りてもらい、まずは閑上の「祈りの丘」で鎮魂を祈っていただき、青葉城趾、二口溪谷方面、松島：円通院を案内してみちのくの紅葉を鑑賞していただき、みんなから「内容の濃い2日間だった！」と言ってもらえた。

今回の仲間との再会からも、更に誇りと喜びを持って、「♪君たちがい～て、僕がいた♪」と唱い続けたい！